第１学年音楽科学習指導案

指導者　小林　美佳

１．指導内容　Ａ表現（１）イ　，〔共通事項〕（１）ア（音色・旋律）

２．題材名　　聴いて，うたって，「声」の魅力を感じよう！

３．題材設定の理由

本題材では，さまざまな歌曲を歌唱するときの「声」を意識した授業を展開する。歌曲の歌い方にはつくられた国や地域，時代などによって，さまざまな特徴がある。同じ日本の歌曲でも，わらべうたや童謡・唱歌，演歌，現代のいわゆるポピュラーソングでは歌い方が異なる。その理由は歌曲がつくられた社会的背景や，地域の伝統や文化，人々の感覚の変化などが異なるためと考えられる。幼い頃から今まで何気なく歌ってきた歌曲であるが，どんな発声で歌うかを考えたことがある生徒は，ほとんどいないのではないだろうか。中学校に入学したときには，多くの生徒が「地声で歌うより裏声で歌う方がよい」という認識をもっている。それは生徒が西洋の発声に多く見られる頭声的発声で歌うことを，「きれいな声」として当たり前のように習ってきたからである。そのため，音楽の教科書に載っている歌曲や合唱曲は，意識せずとも西洋の発声で歌っている。しかし，わらべうたになると，様子が変わる。遊び歌でもあり，動きがつくためか，きれいに歌おうという意識はあまりないように思われる。自分のもつ自然な声で，楽しんで歌っているのではないだろうか。どちらが良い，悪いということではなく，さまざまな背景をもとにして成立してきた「声」の特徴に気づき，実際に歌うことでよさを感じ取ることができれば，生徒の音楽への興味・関心はさらに広がっていくのではないだろうか。本題材では，「我が国の伝統音楽」である長唄を学ぶための入り口として，日本と西洋それぞれの発声を学ぶことで「表声」と言われる日本の声に対する興味・関心を高めたり，それぞれのよさを感じたりしてほしいと考えている。

「地声」はきたない声，「裏声」はきれいな声，という認識のみをもつのではなく，「地声」ではなく独特な響きをもった「表声」という新たな認識をもつことで，日本人のもつ自然な声の魅力に気づいてほしい。1年生は声変わりをする生徒も多く，頭声的発声では歌いにくいと感じることもある。また，うまく歌えないことで，歌が嫌いになってしまう生徒もいる。だからこそ，実際に「表声」に挑戦することで自分のもつ自然な声のよさに気づき，自然な発声で歌う楽しさを感じ取ってほしい。そうすることで，これまであまりなじみのなかった「我が国の伝統音楽」に親しむきっかけとしていきたい。ただし，西洋の発声のよさ，美しさも同時に改めて感じ取ってほしいという願いもある。それぞれの「声」の魅力に気づき，楽しんで歌唱活動ができるよう仕組んでいきたい。

そこで今回は，まずわらべうたと教科書に載っている日本の歌曲の歌い比べから始め，無意識に違った発声で歌っていることを生徒に意識させる。そのうえで，長唄の講師の模範演奏を聴取することで，「わらべうたと日本の歌曲のどちらに近いか」「どんな声の出し方なのか」「普段歌っている合唱などと，どう違うのか」などについて考えさせる。「我が国の伝統音楽」の一端を聴取して感じ取ったことを，実際に歌唱することで確認し，その魅力に気づかせていきたい。

2時間目は，声楽の講師を招聘して，頭声的発声について学ぶ機会とする。「表声」を学んだ上で改め

て発声の違いを聴き取り，それぞれの魅力を感じ取りながら，歌唱活動を行いたい。教材には西洋の歌曲を選択し，曲にあった発声について意識できるよう工夫する。

3 時間目には，「我が国の伝統的な歌唱」と「西洋の歌曲」をそれぞれどのように歌唱表現すればよいか，試行錯誤させる。曲種に応じた発声で歌うことを意識し，聴き手に伝わる表現を目指して活動させたいと考えている。本題材の授業を通じて，さまざまな「声」の魅力を感じ，歌唱活動を楽しむことのできる生徒を育成していきたい。

４．全体研究との関わりについて

全体研究では今年度から，『新たな世界を主体的に創造する生徒の育成～「見方・考え方」を働かせた学びを通して～』という主題のもと，研究を進めている。

これを受けて音楽科では，教科総論で述べたように生徒が意欲的に活動することのできる「音や音楽との出合い」を大切にして授業を構成していきたいと考えている。聴取活動を主とした「音や音楽との出合い」によって，気付いたり理解したりしたことを，表現活動に生かすという学習のつながりを意識していきたい。また，「我が国の伝統音楽」を教材とすることで，伝統や文化を尊重し，新たな意味や価値を自覚することのできる生徒の育成を目指していきたい。

（１）「音楽的な見方・考え方」を働かせた学びについて

新学習指導要領解説では，音楽的な見方・考え方を「音楽科の特質に応じた，物事を捉える視点や考え方であり，音楽科を学ぶ本質的な意義の中核をなすもの」として次のように示している。

【中学校音楽科】 音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること。

音楽科では，教科総論で述べたように，「生徒の知性と感性の両方をいかに働かせ，音楽の学びにつなげるか」を重視していきたい。

本題材では，これまで生徒が無意識に行っていたことを，意識化することから始める。生徒は，歌い方や発声の違いに気づくことで，「それはなぜなのか」「なにが違うのか」などを考えるようになる。また，仲間の演奏や講師の演奏を聴いたり，聴いて気付いたことや感じたことを意見交換したりすることで，それぞれがどんな特徴をもつ声なのかを感じ取っていく。「表声」という新たな音や音楽との出合いを経験することで，生徒は知性や感性を働かせ，自分なりのイメージをもち，言葉や歌唱でそれを表現しようとするのではないかと考えている。

（２）「音楽的な見方・考え方」を働かせるための手立て

音楽科では，「音楽的な見方・考え方」を働かせ，学びを深めるために，二つの工夫を行う。まず一つ目の工夫は，聴取活動である。音や音楽との出合いは，聴くことから始まる。聴取活動を効果的に仕組むことで，相手が伝えようとしている表現の工夫を聴き取る力の向上も期待できる。音楽を表現する力だけではなく聴き取る力も合わせて高めることで，生徒の思いや意図は深まり，さらなる音楽活動の充実を図ることができると考えた。本題材では，「我が国の伝統音楽」を学ぶ第一歩として，長唄の講師を招聘した。ほとんどの生徒は「表声」と呼ばれる長唄の発声を初めて聴くこ

とになる。講師による生演奏は，生徒の感性を働かせるために効果的であると考える。

二つ目は，歌唱教材の工夫である。授業の前半に歌い方を意識させるための歌唱教材として，わらべうたと童謡・唱歌を選択した。懐かしい曲を歌うことで関心を高め，長唄との共通点を感じ取る活動にもつなげていきたい。

５．教材について

（１）教材

【聴取教材】　・長唄『鳥羽繪』　杵屋六左右衛門　作曲

・『野ばら』　シューベルト作曲/　近藤朔風　訳詞

【歌唱教材】　・『かごめかごめ』　わらべうた

・『赤とんぼ』　三木露風　作詞/　山田耕筰　作曲

・長唄『鳥羽繪』　杵屋六左右衛門　作曲

・『野ばら』　シューベルト作曲/　近藤朔風　訳詞

（２）教材選択の理由

本題材では，日本と西洋ではどのように声の出し方が違うのかを感じ取り，実際に歌唱することでそれぞれのよさを実感できることを目指している。そのため，聴取教材は講師の専門である長唄とドイツリートを選択し，生徒に新鮮な驚きを与える機会としたい。

１時間目の導入で使用する歌唱教材は，わらべうたと『赤とんぼ』である。わらべうたは，本校の２年生にアンケートを採り，最も知っている曲として『かごめかごめ』を選択した。また，歌唱して声を比較するための教材として，『赤とんぼ』を選択した。同じ日本の歌であるが，無意識に違う発声で歌っていることに気付かせることで，曲種に応じて声は違うのだということを実感させていきたい。

長唄は講師が模範演奏したものをそのまま使用し，まずは講師の真似をすることから始められるようにした。ドイツリートは講師との相談のもとで，シューベルト作曲の『野ばら』を選択した。親しみやすい旋律と，歌唱しやすい音域で，生徒が取り組みやすいのではと考えた。今回の授業では，講師による聴取活動では原語と日本語両方で歌唱し，生徒の歌唱活動では日本語の訳詞で歌唱する。本題材の目的が「我が国の伝統音楽」と「西洋の音楽」の発声の違いを感じ取ることであること，生徒にドイツ語での歌唱をさせることは困難であることから考え，訳詞での聴取・歌唱とした。しかし，ドイツリートのもつ独特な発音や響きを感じさせたいという思いもあるため，授業の最後に講師による原語の模範演奏を行うこととした。

６．題材の目標

・「我が国の伝統音楽」と「西洋の音楽」について興味・関心をもち，特徴的な発声について感じ取ることができる。

・「我が国の伝統的な歌唱」と「西洋の歌唱」の発声の違いを感じ取り，それぞれのよさを味わいながら工夫して歌唱することができる。

７．題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
①　「我が国の伝統的な歌唱」と「西洋の歌唱」それぞれの発声や歌い方の特性に関心をもち，それらの違いを聴き取ったり，特性を生かして歌唱したりする活動に主体的に取り組もうとしている。	①　「我が国の伝統的な歌唱」と「西洋の歌唱」それぞれの発声や歌い方の違いを知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，「西洋の歌唱」にふさわしい声や歌い方の特性を生かした音楽表現を工夫し，どのように歌うかについて思いや意図をもっている。	①　「我が国の伝統的な歌唱」と「西洋の歌唱」それぞれにふさわしい声や歌い方の特性を生かした歌唱表現に必要な，発声や言葉の発音，身体の使い方などの技能を身に付けて歌っている。

８．指導計画と評価計画　（全３時間）

ねらい	時	学習活動	評価規準	☆Ａと判断する生徒の状況例 ■個別な働きかけを要する生徒への支援	備考
日本の声について学び，普段の歌唱方法との違いを感じ取る。	1時間目（本時）	・わらべうたと『赤とんぼ』を歌い比べ，声の出し方の違いを感じ取る。 ・長唄講師の演奏を聴き，声の特徴や歌い方の違いについて聴き取ったことを意見交換する。 ・講師の指導のもと，表声での発声を学び，実際に歌唱する。	関①「我が国の伝統的な歌唱」と「西洋の歌唱」それぞれの発声や歌い方の特性に関心をもち，それらの違いを聴き取ったり，特性を生かして歌唱したりする活動に主体的に取り組もうとしている。 【観察・ワークシート】	☆自分たちの歌う声と、講師の声の違いを聴き取り、自分なりに講師の声に近づけようとして歌唱している。 ■聴き取りができない生徒には、わらべうたの歌い方と似ているか、『赤とんぼ』の歌い方と似ているか、もう一度歌って確認させる。歌唱できない生徒には、教師が一緒に唄うことで自信をつけさせる。	・学習形態 一斉 ・学習活動 グループ

西洋の歌曲の歌い方について学ぶ。	2時間目	・西洋の歌曲を取り上げ,「我が国の伝統的な歌唱」との違いを学ぶ。 ・声楽講師の演奏を聴き，声の特徴や歌い方について聴き取ったことを意見交換する。 ・講師の指導のもと，発声を学び，実際に歌唱する。	創①「我が国の伝統的な歌唱」と「西洋の歌唱」それぞれの発声や歌い方の違いを知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，「西洋の歌唱」にふさわしい声や歌い方の特性を生かした音楽表現を工夫し，どのように歌うかについて思いや意図をもっている。 【観察・ワークシート・録音】	☆長唄との発声の違いを理解し、西洋の歌曲の歌い方について自分なりの思いや意図をもって歌唱活動に取り組んでいる。 ■歌唱活動ができない生徒には、西洋の歌曲の発声についてもう一度確認し、どうしたら曲にあった表現ができるかを仲間と一緒に考えさせる。	・学習形態 一斉 ・学習活動 グループ
声の出し方や特徴を意識して，日本と西洋それぞれの歌曲を歌唱する。	3時間目	・日本と西洋それぞれの歌い方を学んで，なぜそのような違いがあるのかを考える。 ・それぞれの歌曲のよさを生かしてを歌唱するために，どんな歌い方をすればよいか, 試行錯誤する。 ・それぞれのよさを感じ取り，味わって歌唱する。	技①「我が国の伝統的な歌唱」と「西洋の歌唱」それぞれにふさわしい声や歌い方の特性を生かした歌唱表現に必要な，発声や言葉の発音，身体の使い方などの技能を身に付けて歌っている。 【観察・ワークシート・録音】	☆それぞれの発声の違いを理解して、そのよさを感じるとともに、曲にあった表現を工夫して歌唱している。 ■歌唱できていない生徒には、前回までの授業を思い出し、それぞれの発声について確認して、どんな違いがあるかを考えながら教師が一緒に歌唱する。	・学習形態 個人・グループ ・学習形態 個人

９．本時の授業について

（１）日時　平成 29 年 10 月 21 日（土）10：10

（２）場所　山梨大学教育学部附属中学校　第１音楽室

（３）本時の目標：　曲種による発声の違いについて特徴を聴き取り，長唄の発声を意識して唄う。

（4）展開

過程	学習のねらいと学習活動	教師の指導・支援	評価・備考
導入 （10 分）	**1．わらべうたと『赤とんぼ』を歌い比べ，歌い方に違いがあるかを考える。** ・一度目は，何も考えず素直に歌う。歌った後に，わらべうたと何か違うことがあったかを確認する。 ・二度目は，声の出し方を意識して歌う。意識することで，歌い方に変化があったかを確認する。 ・頭声的発声を意識してわらべうたを歌い，感じ取ったことを意見交換する。	・幼いころに歌っていた様子を思い出して，遊んでいる感覚で歌わせる。 ・遊び歌でもあるわらべうたを歌うときには，声の出し方を意識することは少ないと実感させる。 ・『赤とんぼ』は，何も意識しなくても「きれいに歌おう」として，頭声的発声で歌唱していることに気付かせる。 ・同じ日本の歌なのに，歌い方に違いがあるのはなぜかを考えさせる。	・学習形態 一斉
展開 （35 分）	**2．講師の模範演奏を聴き，普段の自分たちの声や歌い方との違いを感じ取る。** ・長唄の演奏を聴き，声や歌い方の特徴を聴き取る。 ・普段合唱などで歌っている声の出し方と何が違うのか考える。 **3．日本の声を意識して長唄『鳥羽繪』を歌唱する。** ・発声練習を行いながら，表声の出し方について学ぶ。 ・実際に長唄の一節を歌唱することで，普段の合唱との違いを実感する。 ・講師の真似をして，一節ずつ歌唱する。	・長唄は日本の伝統的な音楽であること，表声で歌うことなどの知識も含めて伝える。 ・長唄の特徴的な声がなぜ生まれたのかを含めて考えさせる。 ・曲種に応じた発声で歌唱することで，その曲のよさをより引き出すことができることを感じ取らせる。 ・日本の音楽に興味・関心をもち，西洋音楽との違いについて実感させる。 ・表声，地合，産字について確認する。	・学習形態 一斉 ・ワークシート 記入 関①「我が国の伝統的な歌唱」と「西洋の歌唱」それぞれの発声や歌い方の特性に関心をもち，それらの違いを聴き取ったり，特性を生かして歌唱したりする活動に主体的に取り組もうとしている。

	４．講師の声に近づくための工夫について考える。 ・ひととおり歌唱できるようになったところで，講師の声により近づくことができるかどうかを考える。 ・今の自分たちの声をどう工夫すればよいか，意見交換をする。 ・ペアやグループで実際に歌唱して試す。	・今回の授業だけでは，講師のように歌唱することは難しいが，自分たちの声に足りないものは何かを考えさせる。 ・発声や歌い方に着目して，意見交換したり，試したりさせる。 ・最後に全体でもう一度歌唱させる。	【観察・ワークシート】 ・学習形態 ペア，グループ
まとめ （5 分）	**５．活動の振り返りと，次回の内容の確認。** ・自己評価をワークシートに記入する。 ・今日の授業について感じたことなどを意見交換する。	・講師から講評をいただく。 ・次回は普段歌っている西洋の発声について学ぶことを伝える。	・学習形態 一斉